英国の飲食チェーン、10月の既存店売上高は横ばい 5カ月連続の成長に幕

バーは3.1%減、フード・トゥ・ゴーは7.9%減となり、レストランとパブの小幅増を相殺

2026年11月20日（金）



英国のレストラン、パブ、バーのチェーンでは、10月に売上の勢いが弱まり、既存店ベースで5カ月続いた成長が途切れた。バーと持ち帰り業態の不振が、レストランとパブの小幅な増加を相殺した。

NIQ RSM Hospitality Business Trackerによると、グレートブリテンの10月の既存店売上高は、名目ベースで前年同月と変わらなかった。9月には既存店売上高が2.7%増加しており、伸びは大きく鈍化した。

NIQが水曜日に発表したところによると、10月の調査対象は、月次調査向けに売上高を直接報告す

る、レストラン、パブ、バー、フード・トゥ・ゴーのチェーン122グループ。数値は両期間に営業していた店舗を比較しており、新規出店や閉店の影響を除いたものだ。

横ばいという結果は、ここ最近の傾向から明確に転じたことを示している。既存店売上高は5月以降増加していたが、10月には伸びが大幅に弱まった。この変化は、秋が進むにつれて外食・飲食業界での消費が不均一になったことを示唆する。一方、新規店舗を含めれば、業界全体の売上高はなお増加した。

主な業態の中ではレストランが最も好調で、既存店売上高は2025年10月から0.8%増加した。パブも0.4%増とわずかながらプラスを維持した。しかし、他の業態の減少がこれらの伸びを打ち消した。バーの既存店売上高は3.1%減、フード・トゥ・ゴーは7.9%減だった。

新規出店分の売上高を含めると、122グループの総売上高は前年比3.7%増加した。既存店売上高が横ばいでも総売上高が増加したことは、既存店舗の成長が止まる一方、新規出店による事業拡大が全体の売上高を押し上げ続けたことを示している。

調査では、ロンドンとグレートブリテンのその他の地域との間に地域差も見られた。M25内では、10月の既存店売上高が0.7%増加した。M25外では0.3%減少した。この差からは、同月、首都およびその周辺の営業状況が国内の他地域よりやや底堅かったことがうかがえる。

10月の数値は名目ベースで、インフレ調整は行われていない。それでも、年末の第4四半期が始まった時点で、大手の外食・飲食事業者がどのような業績を上げたかを直接示すデータとなる。年末の重要なホリデーシーズンを控える時期だけに、注目度は高い。

業態別の内訳からは、事業者が直面する圧力の違いが浮かび上がる。レストランとパブのチェーンは前年をわずかに上回る売上高を維持した一方、バーと持ち帰り業態にとっては厳しい月となった。調査対象の業態の中で、持ち帰りの落ち込みが最も大きく、店内飲食を提供する業態ではバーだけが明確な減少を記録した。

この調査は外食・飲食市場全体ではなく、複数店舗を展開するグループに焦点を当てているため、英国全土で大手事業者がどのような業績を上げているかを把握できる。こうした企業は、成熟店舗が苦戦しているときでも、新規出店によって総売上高を伸ばすことが多く、10月のデータもその傾向に沿っている。

投資家、サプライヤー、不動産所有者にとって、今回の数値は、事業拡大が引き続き業界を支える一方、既存店舗の需要は9月より大幅に弱まったことを示している。前月は既存店の伸びが力強く、勢いがより安定していることをうかがわせていたが、10月にはその勢いが失われた。

今回の減速は、業態によって状況がいかに不均一になっているかも浮き彫りにした。パブとレストランはおおむね安定していたものの、いずれも力強い成長には至らなかった。バーとフード・トゥ・ゴーの減少が全体の数値を押し下げ、業界全体の既存店売上高は横ばいとなった。

NIQは水曜日に発表した声明で、RSMと共同で実施する月次調査の一環としてデータを公表した。報告書は、調査対象の122グループから直接提出された売上高に基づき、10月の前年比変化を測定した。